

### 証詞③

「不思議な静けさに包まれて」

ホノルルキリスト教会 関れい

これまでの経緯 (記：関真士)

2017年11月30日 深夜、妻の左腰のあたりに突然の激痛が襲い、救急に入りました。モルヒネを四本打っても痛みが収まらず、これはただの腰痛ではないと思い始めました。CT検査の結果、左大腿骨に4センチのボール大の腫瘍があり、それが痛みの原因ということでした。続けて精密検査が行われた結果、他にも腫瘍が見られるということで、おそらくこの腫瘍は悪性で、そうであるとするなら普通ならあと1年くらいでしょうと、いきなり余命宣告を受けました。

直ぐにそのまま入院し、あらゆる検査の結果、肺を原発として、リンパ、左大腿骨、右尻骨に転移がある、ステージ4の肺腺癌であることが分かりました。

その日から、ベッドの上から絶対に動かないようにと告げられました。左大腿骨は、今にも崩壊しそうな状態で、大骨折の恐れがあるということでした。それにしても、入院前日まで元気に教会の階段を駆け上り、フラの練習にも参加し、ステップを踏んで踊っていたのに、大骨折の恐れがあるとは…。何の自覚症状もなく、熱や咳込みもなく、体重も増えていることを気にしていたのに、まさに青天の霹靂とはこのことです。

左大腿骨は、直ちに手術を受け、チタンの棒を2本入れて補強しました。ガン細胞を全部取ることも出来るのですが、そうすると一生足は不自由になると言われ、生活の質を考えてチタンによる補強となりました。

続けて4日後に左肺にある癌の腫瘍を取り除くため、肺の上部を切除する手術を受けました。本来ステージ4だと手術はしないのですが、妻の場合は原発となった肺腺癌がとても小さく、これは取れるということで手術をしてくださりました。それはとてもラッキーなことだと医師に言われました。

そして、治療方針を検討するために腫瘍のタイプを検査したところ、妻の場合は、最新の治療薬である分子標的薬が効くタイプのものであることが分かりました。

2018年の2月1日からタルセバという分子標的薬を飲み始めました。副作用もあるのですが重篤なものではなく、うまく付き合っていく感じです。

足と肺の手術の直後から、歩行のリハビリと放射線治療を受け、少しずつ体力を取り戻してきました。この時点での余命宣告は、平均で2年から3年ということでした。それは分子標的薬に対してガン細胞が耐性を獲得して効かなくなるということらしいです。

この原稿を書いている現在、ガンの宣告を受けてから約1年9ヶ月となりましたが、分子標的薬は効果を持続しています、そしてこのたび、ドクターから、目に見えるガンがなくなったという診断を受けました。(左大腿骨と右尻骨に残っていた腫瘍のこと)。しかし目に見えないガン細胞は、おそらく全身にあるはずだから、続けて分子標的薬を飲み続け、定期検査も続けていきましょうという医師の判断でした。

目に見えるガンがなくなったということは、それだけを考えれば、今現在、妻の身体は、健康体であるのと同じだということでもあります。

ドクターのこの言葉を聞いたとき、それは私たちにとって本当に嬉しい報告だったのですが、なぜか私たちは二人とも、その時に「不思議な静けさ」に包まれたのです。診察室を出て、車に乗るまでの間、妻が私を見上げて聴きました。「しんちゃん、どうしてヤッターって感じじゃないの？」自分でも戸惑っていると、直ぐにれいが言いました。「実はわたしも。これ、なんだろうね。とても静かな感じ。」

すでに、これまでの経緯は証詞として2回『舟の右側』に掲載されていますが、先回の2018年11月から現在までの歩みを、妻が証詞をさせていただきます。

#### 恵みに生かされて

昨年11月の終わりに、この病をいただいて1年を迎えました。病をいただいと表現するのは、病が発覚したその日を忌まわしい日と思う気持ちが、心の中にないからです。病によって、痛みや苦しみ、また死や命の時間と向き合う恐れを経験しましたが、神に助けを求めて叫んだその時に、私が今まで知ることのなかった神の恵みが私の人生にもたらされたのです。

その恵みとは、「神が私と共におられる」ということです。そして、共におられる主は良いお方であり、その方からいただいた「平安」という恵みです。経験したことのない痛み、目の前に置かれた余命の宣告は、今までに流したことのない涙を流させ、この涙を知ることのなかった昨日の時間に戻ることが出来ないという喪失感をもたらしました。

でも神は「神さま、私はどうしたらいいですか？ 助けてください！」という叫びに答えて、みことばを私の心の内に思い起こさせてくださいました。そして、みことばの真実が、現実の迫りをもって私に揺るぎない平安を与えてくださったのです。

「神のわざがこの人に現れるためです。」(ヨハネ9:3)

「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」(ヨハネ11:40)

このみことばは、私の全身に、また細胞にまで沁みわたるようにして不安と恐れを締め出し、心が落胆や失望へ向かおうとする道を閉ざして私の心を守り、平安を与えてくれました。

そして、神が共におられる平安は、病をいただいた道のりの中でも、困難がやってきて心が揺すぶられ試されるような時でも、みことばが確かなものであることを思い起こさせてくれました。

そして、再び主に信頼し、神の愛とみことばに留まる道へと導いてくれました。そしてドクターの伝える余命の宣告の時間ではなく、神が私を生かしてくださる命の時間を生きることに関心を向けさせてくれました。今、生かされて存在しているということ、そのことが本当に感謝で、みことばに支えられて歩む日々がスタートしていました。

#### 家族と共に

退院後は、特に家族と共に多くの時間を過ごしてきました。教会へは日曜日の礼拝を捧げることが主で、ほとんどの時間を家庭で、主人や子供たちと日常生活を過ごしました。左足の手術も受けましたので、リハビリに通ったり、分子標的薬の治療を受ける中で、重いものではありませんが、湿疹や脱毛、足指の腫れなどの副作用も出ることが多く、比較的元気ではありましたが疲れやすいので、週に何日かは横になっていることもありました。また、そのような中でも旅に

出て、主人と共に日本の家族に会いに行つて、私の元気な姿を見てもらうことや、短くても主に在る家族に会う交わりを持つ機会を得て、体調を見ながら出来る限り良いと思うこと、今しか出来ないことを選んでしてきました。

退院時に、四人のドクターから伝えられた、あなたは何を食べても、どこに行つても、何をしても良いということばは、私の心を本当に自由にしてくれました。今思えば、52年の人生の中で、こんなことばをもらったことはありませんでした。

そのことばは、私を広い所に立たせてくれました。地上において、神の千年のような一日を、神の命の時間に身を委ねて生きる中で、もっと主人や子供たちと一緒にいたい、長く時間を共に過ごしたいという思いが、私の内に希望や期待を与えてくれました。

またもう一方で、「余命ってあとどれくらいなのかな？ 2～3年だと言うドクターの診断の通りだってあり得る。」という思いも心の中を行き来していました。神に生かされるように生きることを決め、地上での命の時間に自由と平安を得ながらも、死はいつ来るのかという思いが心のどこかにありました。死に対しての恐れはありませんでした。でも、大切な家族や、教会、友人たちとの別れを想うとき、私の心は揺らぎました。私のことを知り極めておられる神は、その私の想いをよくご存知でした。

ホテルのこと～二つの思いの狭間で

昨年の9月に、米国東海岸での集会で主人がメッセンジャーとして招かれ、同行させていただいたとき、神学校時代からお世話になっている錦織学&範子先生ご夫妻のご自宅に泊めていただきました。

そこで、夜の庭にホテルが飛んでいるのを見つけました。ニューヨークにホテルがいるなんて！ と大感激でした。ホテルを見たのは子供のころ以来、何年ぶりでしょう。そのとき、なぜかふと「私、死ぬのかな？」という思いがよぎりました。その時に、死への恐れはありませんでしたが、次第に、もしかしたら、委ねたこの命は短いものかもしれない。それでも大丈夫？ という自分自身への問いになっていきました。

自分がステージ4の末期癌であるということは、心のどこかにいつもありました。5年、あるいは10年、もしかしたら2、3年かもしれない…、という思いは常にあり、長く生き続けることへの願いと同時に、死が近いのかもしれないという、ふたつの思いが共存していました。生きることと死ぬこと、この両方に対する心の準備がいつもあって、それが私をどこか消極的にもさせたような気がします。

私は、この身体にある、「癌」という病の前に、私の心が複雑に反応しているを感じずにいられていませんでした。家族と共に過ごす時間の中で湧き上がったのは、家族と共に長く地上で生きて、もっと家族の幸せを見たいという願いでした。その生きる願いと死への備えと、この二つの思いを持つ複雑な心の状態、。ただ、その心の状態を解消しようとするのではなく、その自分をそのまま受け留めるということも大切にしてきました。神は、そんな私のことを、傍らで見つめていてくださっていたと思います。

病を得てからの2年目は特に、みことばを思い起こすことによって神の愛に留まり続けることや、神に信頼し委ね続けることを多く学びました。それは、私の歩み方をシンプルにしてくれました。ただ、神が私と共におられる。そのことだけが私の内に残りました。それは、湧いてくる波立つ思いを治め、私がただ存在し、生かされている命の尊さに目を向けさせてくれました。

今年の6月に、主人が休暇を取得して日本へと家族旅行をしました。日曜日には、進藤龍也&由美先生ご夫妻の牧会される“罪人の友主イエスキリスト教会”で礼拝を守らせていただきました。

その礼拝の中で、進藤先生が「ここにいる癒されたれいさんが…」と私を紹介してくださいました。その「癒されたれいさん」という言葉が、私の心のどこかにあった“ステージ4の末期癌”という思いをヒットしたのです。その瞬間「ああ、もうこのステージ4ということを私から手放そう。私は病気以上の癒しをいただいている。」そう受け取ることができました。それでそのまま、紹介を受けて「れいさん、ご挨拶をどうぞ！」と招かれて立ち上がった時に、「私は病気以上の癒しをいただいている者として歩みます。」と言い表して感謝しました。ステージ4という鎖から、自由になった時でした。

この日本旅行は、癒しの旅でした。家族や友人知人と再会し、「必ず癒されるよ」と祈られ、温泉では湿疹や足の指の腫れが引き、岡山から東北までのソウルフード（やはり私にはピカピカの白いお米やお茶や梅干し！）を楽しみました。「何をしてもいい！」そう言ってくれたドクターの皆さん、ありがとう！ それをさせてくれて、とりなしの祈りと共に送り出してくれたみなさん、ありがとう！ そして、天地を造られた時に、それを一つ一つ、「良し！」と言って私たちのためにすべてを備えてくださった父なる神さま、本当にありがとう！

そんな感謝を持って、ハワイに戻ったある日、車を走らせている時、ふと、イエスさまが神であられたのに、人となられて私のために命を捨てて死んでくださったことが心に迫ってきて、涙が溢れてきました。ちょうどその時、車のラジオが流れていて、クリスチャン放送曲のアナウンサーが「神さまはあなたのことを激しく、強く愛しているわ！ ローマ書8の11！」と、強い語調で英語で話すのが耳に飛び込んできました。そして私はすぐにパーキングに車を停めて、聖書を開きました。

「イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリストを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられるご自分の御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださいます。」（ローマ8：11）

私のこの身体は死ぬべき身体です。本当にそうです。ステージ4のこの身体には、全身にガン細胞が回っていると医師にも告げられていました。でも、十字架で死んでくださったイエスをよみから引き上げ、死から解放してくださった父なる神の御霊が、私のうちに住んでおられる。死から解き放って自由と命を与えてくださった方が、私のこの死ぬべき、滅ぶべき身体を、生かしてください。私は、この肉の身体で生きるのではない。御霊によって生きるのだ。そして、この御霊は、死ぬべき身体をも生かしてください。車の中で泣きました。「イエスさま、私のために十字架で死んで、そしてこの恵みを完成して下さって、本当にありがとう！」

私が生きるこの命が、肉の体によって生きるということから、御霊によって生かされることに、

完全に変えられました。神はこのみことばによって、私の見ている視線をこの肉体から離し、御霊に目を向けることに変えてくださったのです。私は病となって、この御霊の恵みを知れました。この恵みは、全て信じる者にすでに与えられています。私は今、病を通してそれを知れたのです。これは恵みです。だから私は病をいただいたと言えるのです。

私は、「よし！これで行こう！」と決めました。私は、この身体で主の証人として生きていこうと決めたのです。

私は神学校時代に、そこで献身と召命のみことばが与えられたのですが、その言葉は、ルカの福音書 24 章 48 節「あなたがたは、これらのことの証人です。」でした。

わたしの献身と召命のみことばは、今のこの時のためのものだった！ わたしが証人として生きて歩むのは、今のこの時に成就された。この病を頂いてこそ、私は主の証人になれた！

「これで行こう！」 その時に、何とも言えない解放感と自由を頂いて、うれしくてうれしくて、すぐに誰かに話したかったです。主人に伝え、家族に伝え、そして祈って支えてくださった教会の皆さんに、感謝と共に証詞させてもらおうと思いました。約 30 年前に与えられたこのみことばが、今、病を得た私に成就したことを、日曜日の礼拝の後のコーヒアワーで、飛び入りで証詞したいと主人に申し込みました。

いただいた自由と解放に、心がたとえようのない喜びと平安に満ちていました。私は証人として生きる！ とても強い思いでした。

しかし、喜びに溢れて礼拝に行ったその日曜日、礼拝の後には、教会全体の特別な学び会があって、時間に余裕のある次週に証詞することになりました。

私はすぐに証詞したかったのですが、それが一週間伸びました。しかし、ここにも主の計り知れない計画がありました。

次の日の月曜日の朝、腫瘍内科の定期健診の日でした。主人が同行してくれて病院に行きました。血液の検査結果などを聞き、温泉で副作用の湿疹が無くなったことや、(去年も同じことがあった時、ドクターに伝えると、ドクターは日本旅行に行った時、同じ温泉に行ってきたと笑いながら言っていました)。新しく生えてきた髪の毛が、パーマをかけたようにクルクルとカールしてきたことなどを伝えました。このヘアスタイル、今とても気に入っています。

次に主人が何気なく、癌の腫瘍はどうですか？ と聞いた時、ドクターがさりと「身体に残っていた腫瘍は見えなくなっている。」と言いました。

主人と目と目を合わせて、それからもう一度聞きました。答えは同じでした。それから、おそらく全身に回った癌細胞はまだあるだろうから、検査と薬の服用は続けましょうという指示をいただき、いつものように「Thank You」と挨拶をして車に向かいました。

心がとても静かでした。飛び上がって喜んでもいいことでした。でも、ただ、主人と手を繋いで、黙って歩きました。静かな驚きの中に、確かに神の現れがありました。この静けさは、癌とわかって余命宣告を受けた時、主人と「神のわざがこの人に現れるためです。」というみことばにひれ伏して祈った後の静けさと同じでした。神が権威をもって現れてくださった、静かな静かな現れです。そして心のうちにある平安。それはどんな時も変わらない平安でした。

病院のベッドの上で、痛みにならなっていた時も、放射線治療を受けるためベッドに寄せられて病院の廊下を移動していた時も…、どの時を思い出しても心にある平安はいつも変わらず、私の

内にありました。ただ神が、私と共におられた。それが、病の中で私が得たことです。病をいただいて得た恵み。これが私への静かな神の現れです。

「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。

たじろぐな。わたしがあなたの神だから。」

記：関真士

ドクターからのことばを聞いたとき、私の心は平静でした。それはれいも同じでした。ヤッター！ ハレルヤ！ というはじけるような喜びではなく、不思議な静けさに包まれました。自分でもその感覚に戸惑いました。

これまでの歩みの中で、神に信頼することと、ドクターに信頼することは対立するものではありませんでした。ドクターの診断と治療を受け入れてきましたし、ドクターの尽力には心から感謝しています。しかし、それ以上に神に信頼することを学び、選んできました。これまでの歩みの中で、主は圧倒的な平安で私たちを包んでくださいました。それは、自分たちの信仰が獲得したのではなく、神の真実のゆえに与えられた恵みでした。

そして今、ドクターからのことばを聞いたときも、心にある平安は変わらないのです。最初にガンの宣告と余命宣告を受けたときに与えられた平安と、今のこの時の平安も同じ主の平安なのです。心が恐れと不安に襲われたとき、主を仰ぎ見て得た光と、今のこの時にも輝いている主の光は同じ光なのです。手術室に入っていきときに与えられた賛美と喜びと、今この時にいただいている賛美と喜びも同じなのです。

主のくださる恵みは、つねに最上のものです。あの時には軽い平安、この時にはもっと濃い平安、ということはありません。主は、常に最高の平安と喜びをくださいます。なので、すでに最高のものをいただいているので、今回も、同じように平安であり喜びなのです。

もともと私にとって妻は、すでに癒されている人でした。それは医学的な癒しを超えた、神の癒しを受けているということです。それは信じるかどうかという問題ではなく、目の前にある事実でした。

今回の知らせを子供たちは、本当に喜んでくれました。また、多くの方々が喜んでくださいました。そのことが私たちの喜びでした。その週の礼拝の賛美の中で、この地上でれいと共にもっと生きることができると思ったら涙が溢れてきました。

れいがガンの深刻な状況の中にあって、主の恵みに支えられている姿に励ましを受けてくださる方がいます。また今回の報告を通して、主の栄光をほめたたえ、喜んでくださる方がいます。私たちは、どんな状況の中にあっても、それが病のただ中の中にあっても、病が癒されたときでも、そこで主の恵みに生かされているとき、まことのキリストの証人とさせていただけるのだと思います。状況や結果だけが証詞なのではなく、それ以上に、晴れの日も雨の日も、確かにそこに主と共に存在し、主の恵みに生かされている自分がある、それが証人ということだと思うのです。

「わがたましいよ。主をほめたたえよ。主が良くしてくださったことを、何一つ忘れるな。」(詩篇 130 篇 2 節)

“God is Good All the Time” 主は、あの時も、今も、これからも、良いお方です！